

平成 30 年度第 3 回古賀市スポーツ推進審議会【成人部会】 会議録
(要約筆記)

(事務局)

- ・平成 30 年度第 3 回古賀市スポーツ推進審議会成人部会を始める。よろしくお願いします。
- ・本日の流れは前回の振り返りを行った後、10 年後の古賀市がどうなっていてほしいか、その未来を実現させるためには何が必要になっていくのかを話し合いたい。
- ・次回の審議会ですとまとめたものを発表するのである程度まで進めておきたい。

(事務局)

- ・例えば 10 年後と限定するわけではなく、なっていてほしい古賀をイメージして模造紙に貼りだしていく。

(事務局)

- ・前回は「スポーツへのきっかけ作り」「運動習慣の定着化」「健康づくりの推進」「障がい者スポーツの推進」の 4 点をどうすれば達成できるかを話し合いいずれにも共通しそうなキーワードに「手軽なこと」「アプリの利用」「インセンティブがあること」などがあがった。
- ・世代ごとにヒットするキーワードが多少違うため全世代にヒットするアプローチが必要である。
- ・「障がい者スポーツの推進」のみ、ターゲットは障がい者ではなく環境を支える側であることが確認できた。
- ・どれも民間の力を活用すること、対象を明確にすることが必要である。
- ・一つのキーワードとして「スポーツ×○○＝◇◇」を活用したい。

(委員)

- ・後期高齢者の中でも 90 歳を超えるとスポーツを楽しむ同年代の仲間がいなくなるため、健康促進というアプローチ方法より仲間作りのきっかけになるということを推したい。
- ・高齢になってからスポーツを始めるのは遅いので早くから注意喚起を行うことが必要である。

(委員)

- ・スポーツする時間が無いので親子メインで活動するイベントなどがあると参加しやすい。子どもを放置して運動をするというのは難しい。

(委員)

- ・10 年後の古賀市は高齢者の中でも後期高齢者が半数以上になる見込みがある。その世代が、団塊世代であること、団塊ジュニア世代も高齢者と呼ばれる年代に入ってくることから医療費がかさむ。その対策も兼ねて 40 代のうちに対策を取らないといけない。子どもも同様に運動する習慣をつけておくことが必要。

(委員)

- ・そのためにはボランティアが必要になる。怪我が怖いので個々の状態を見極めることが必要なので求められるレベルは高いかもしれない。

(委員)

- ・ボランティアではなく有償で参加者からお金をもらう場合、責任感を持ちモチベーション維持ができる。それにより一人の寝たきり患者を予防でき、医療費を削減できたと仮定すると、大きなプラスになると思う。そこに投資する価値は十分にある。無償だと手数が少ないため、講師代として市からの補助金があればいいかもしれない。

(事務局)

- ・スポーツは地域の指導者が無料で教えたりしているので無償できることがあたりまえになっているが、少しずつ認識が変わってきている。例えば退職した高齢者の方はお金を払ってまでスポーツジムに通っている。それほど意識が変わりつつあるので将来、スポーツをすることに対してお金を払うことがあたりまえになっているとよい。

(委員)

- ・ジムに通っている方は若年層より高齢者の方が多い印象がある。

(委員)

- ・民間が行っているイベントにお金を払うことに抵抗はないと思うが、市主催の事業ではどうか。

(委員)

・抵抗は当然あるはず。しかし、福祉のほうではサービスを受けるためには受益者負担になっている。財源が少ない以上、スポーツも同じようにするべきだとは思う。

(事務局)

・前回の会議でも出た意見の中に「民間の力を活用する」というものがあるが、例えば行政が主体で事業を行うわけではなく、行政できっかけを作り、そこから民間に繋げるような形はどうか。

(委員)

・リミック教室を無料でやっている市などもあるが、そちらに人を取られてしまい、有料で教室を運営している先生は困っていた。

(事務局)

・例えば市で体験会を開くときは無料で開催し、民間の講師に来てもらう。そのまま興味がある参加者は民間の教室にながれてもらう。企業と行政双方にメリットがある形を作る。このような形でのきっかけ作りでもいいと思う。

(委員)

・福祉の分野では、地域のデイサービスの職員が公民館などにリハビリ講座などの形で社会・地域貢献をしている。そこで地域のかたと顔見知りの関係になっていると、顔なじみの職員がいるからこのデイサービスを利用しようという風な未来への投資ができる。

・サービスが多様化により発信されている情報が増えているため、必要な情報を拾えているかが心配になる。

・情報を拾えない層にどうやって情報提供していくかも大事になっていくと思う。

そのため文字だけの情報ではなく実際に何をやっているかが目で見える形が大切になってくるのではないか。

(委員)

・軽スポーツなどは何十種類もあり、知名度の低い競技がたくさんあるのでインターネットで動画にして公開するのはどうか。つまり情報の視覚化を行う。

・市でギネスに挑戦してみる。ギネス記録を世界で一番持っている市にしたい。

(委員)

・民間に間口を広げてもらう。例えば、施設にないイベントなどを開催して会員のみに割引する。そうすることで昔はスポーツしていたが今は、仲間がいないため運動していなかった人にもきてもらえると思う。

・本気でやっている人にはついていけないが、少しやってみたいと思っている人をターゲットにして考える。そうするとやはり、民間側のメリットが必要になってくると思う。

(委員)

・現状そのような事業がないのは集客ができないからではないのか。またあまり面倒だと感じると民間の協力を仰ぐのは難しいかもしれない。

(委員)

・市の立場として民間に投げていくのはどう思うか。一つの事業を引き受けると関係ないたくさんしたことまで頼まれて、一人でたくさんのイベントを抱えている現状がある。

・民間でも同じような状況が想定できるのでそれは避けないといけない。

・古賀市で実施していた福祉の講演会で、古賀市の指針でボランティアは雇わず、有償で依頼すると話していた。

(委員)

・若い人はインセンティブが無いと運動をしない。『Coke on』というアプリがあり、ジュースを一本購入したり、一定歩数を歩いたりすると、飲み物と引き換えできるスタンプがもらえたりする。これは企業の社会貢献活動の一種であり、イメージアップにも繋がるうえ、健康増進にも繋がる。こういうのをきっかけに少しの距離を歩くようになる。

(委員)

・息子が空手をしているが、スポーツを始めるきっかけのほとんどは親の影響だと思う。

・子どもと一緒に運動して衰えを感じたので最近また運動を始めた。

(事務局)

・障がい者スポーツという概念を無くしたい。障がいのあるなし関係無く、障がい者スポーツをプレイするのがあたりまえ

の環境を作りたい。

(委員)

・実際にそういう大会を福岡でやっている。健常者が車いすに乗るなど、条件を合わせて誰でも出場できる大会なので古賀でもやってみたい。

(事務局)

・障がい者スポーツを普通のスポーツの知名度まであげたい。
・障がい者スポーツと健常者スポーツを分けて考えるのではなく普通のスポーツと同じように扱うことが必要。

(委員)

・東京オリンピックで障がい者スポーツへの理解が深まるかもしれない。

(委員)

・深まるのではなく、広がるだけだと思う。現状どこにいても障がい者スポーツができる環境がない。パラリンピックの選手でさえ週に1回練習できるかどうか。

(事務局)

・古賀市で三月にデフバスケットボールの全国大会があったが、いまいち知名度も低かった。

(委員)

・周りの理解だけではなく、障がい者自身の参加状況も良くはない。
・障がい者スポーツを行っている団体は、ネットワーク・こだまやココの会以外にはあるのか？

(事務局)

・スポーツ団体として体育施設を使っている団体はそのネットワーク・こだまや民間以外ではない。

(山田先生)

・古賀市の障がい者率を調べる必要がある。全国だと約7%近くある。
・市営の体育館で活動している団体の指導はどのようにやっているか？

(事務局)

・放課後児童サービスの支援員や、スポーツ推進委員の個人的な協力などがある。また、県や地域主催のスポーツ推進委員スキルアップ研修で障がい者スポーツについて学んでいる。

(山田先生)

・そのようにまず、支援する側の育成、同時進行で環境の構築が必要である。そのためにスポーツ少年団のような組織があれば教育しやすいが、古賀市にはない。古賀市としての子どもの育成指針や、どのようにスポーツを振興させたいかを共有する場がないのは良くない。スポーツ推進計画をどのように市民に広げていくかを考えることが必要。

・スポーツ実施率が低いのは20代～30代の人たち。仕事・家庭があるため、子どもと一緒に運動できる機会を提供することが必要。

・eスポーツ(ELECTRONIC SPORTS)がスポーツとして認めていくことが常識になりつつある。実際に運動するだけではなく画面の中でスポーツをするために汗をかくこともスポーツだと認めることで、スポーツに対しての抵抗がなくなる。将来的にはスポーツゲーム以外にもバーチャルで行うことになるためスポーツゲーム以外でも体を動かすゲームをスポーツと認めるべき。

・若い親子のコミュニケーションツールとしてゲームを用いる家庭もある。例えば大きなスクリーンモニターを用意して対戦会を開いてあげると、また違った視点からのスポーツ振興に繋がる。否定することがダメ。

・例えばポケモンGOなどもeスポーツ。子どもたちが町にでる「きっかけ」になる。

・障がい者スポーツの人口を増やすには福祉関係者の協力は必須である。スポーツを広げていくと結果的に色々な人を巻き込むことができる。

(委員)

・花鶴三丁目区では麻雀をスポーツとしている。細かい指の動きが求められて、公民館まで歩いていけないためである。

・eスポーツと普通のスポーツの複合施設がほしい。

・スポーツの種目を紹介する場合、絶対数が多いため、スポットをあてる種目が必要。

- ・美容とスポーツも切れない関係にある。
- ・笑顔の絶えない古賀市にしたい。
- ・馬術場の活用をしたい。
- ・競技スポーツには年齢制限があるので一般的に普及させるのが難しいものがある。

(事務局)

- ・本日出た意見をまとめるが、他の部会で同じような意見もでていたので整理しつつ成人部会として10年後見据えるような形になる。
- ・次回は今回出た意見に対して具体性を求めていく。
- ・以上で成人部会を終了いたします。次回もよろしくお願いいたします。